

石川啄木『一握の砂』の一断片

—— 自意識・ふるさと・共生 ——

加 茂 奈 保 子

はじめに

石川啄木の歌集『一握の砂』は、五つのセクションで構成されている。

最初に「我を愛する歌」として、現在の日常生活の中で「我」の意識がとらえたさまざまな断層を示し、次に「煙」では、中学時代を過ごした盛岡、幼少期を過ごした浜民に関連した歌を集めている。中間に配された「秋風のころろよさに」には、歌集の自序が示すとおり、明治四十四年秋制作の歌が収められる。これにつづく「忘れがたき人々」は、故郷から職を求めて移住した北海道時代に題材をとった歌で編成され、最後の「手套を脱ぐ時」で、ふたたび現在の都市生活をとらえる。

各章は、それぞれに特徴をもちながらも、また、完全に独立することなく、相互に関連しあいながら、歌集全体としてみた時に、現在から過去にさかのぼり、ふたたび現在にかえってくる時間の劇として読めるように配列されているのである。

本稿では、「我を愛する歌」「煙」「手套を脱ぐ時」の三章に限って、各章の特徴と、相互の連関について、考察してみたい。この際、主に「我を愛する歌」に表出する肥大化した自意識に注目し、それと「煙」の思郷歌との関係、また「煙」で過去を通過した自意識が「手套を脱ぐ時」でふたたび現在と向きあう時どのような変化を示しているかを、み

ていきたい。

尚、「秋風のころろよさに」「忘れがたき人々」各章の特徴、およびこの二章を含めた歌集全体を通観することは、もちろん重要な問題であるが、それらは今後の研究課題としたい。

一・自意識の描きだす断層 我を愛する歌

五二・へつらひを聞けば／腹立つわがころ／あまりに我を知る
がかなしき

一〇七・うぬ惚るる友に／合榼うちていぬ／施与ほどこしをするごとき心に

『一握の砂』の最初のセクション「我を愛する歌」から右に引いた二首は、相互を補完しあう関係にある。

おのれを誇り、自惚れを深くする「友」の話に、共感も覚えぬまま「合榼」をうっている時、そこに「友」人同士の対等な対話はない。自分にあるのは、軽蔑心と表裏をなす優越感、いささかの同情から、乞食に「施与」を恵むような心もちである。その心境を知っているからこそ、「へつらひを聞」かされる立場になった時には、「腹立」ちを感じずにはいられないのである。

だが、両者を並べてみると、「うぬ惚るる友」を哀れむ心には、「我を

「知」らない人間への、屈折したある種の羨望が、入り混じっていることがわかる。自己の内外を凝視する眼をもたぬがゆえに、友は自惚れることができ、気のない「合槌」に気づくこともなく、ますます自惚れを深くしていきける。一方、自分には、自惚れることは叶わず、人の「へつらひ」に一時の慰めを得ることすらできない。「我を知る」人間であることは、決して自分を幸福にはしない。「かなし」みはそこに生まれるのであり、人の「へつらひ」を聞く時、「腹立」ちよりも「かなし」みの方に、感情の重心がおかれていることは明らかである。

四三・かなしきは／飽くなき利己の一念を／持てあましたる男に
ありけり

啄木のいう「利己」が、私益ばかりをはかって他人をかえりみない、という一般的な意味合いとは異なっており、「四六時中、目を凝らす自身の中にある目の存在」にふりまわされている状態を意味することは、すでに指摘されている。同様に、「我を愛する」という言葉も、いわゆる「うぬ惚」れ、単純なナルシズムとは異なった傾向を示すものである。「あまりに我を知る」醒めた自意識の眼を、「かなし」みつつも愛惜する心、といえよう。

こうした自意識の眼をもつ人間を、啄木は、自分自身に囚われた「囚人」と表現した。

一三四・人といふ人のところに／一人づつ囚人がゐて／うめくかな
しさ

個別の集団・状況に対する不快や未解決からは、人は逃避することが

石川啄木『一握の砂』の一断片

できる。他人のまなざしに倦めば、「空家に入り煙草^②」を吸って、しばしそれから逃れることもできよう。だが、自分自身から逃れることだけは、絶対にできない。諸々の事象に対し「それもよしこれもよし^③」と、内面の葛藤を感じることなく生きていく人を羨んでみても、人は自分以外の何者にもなることはできない。自分という番人にとらわれた「囚人」のうめきに気づいてはいても、解決の方法をもたないところに、「かなし」さはうまれるのである。

啄木の連詩「心の姿の研究」の中に、「拳^④」という作品がある。

おのれより富める友に慙まれて、
或はおのれより強い友に嘲られて
くあつと怒つて拳を振上げた時、
怒らない心が、
罪人のやうにおとなしく、
その怒つた心の片隅に
目をパチ／＼して蹲つてゐるのを見付けた――
たよりなさ。

あゝ、そのたよりなさ。

やり場にこまる拳をもて、

お前は

誰を打つか。

友をか、おのれをか、

それとも又罪のない傍らの柱をか

「くあつと怒つ」た刹那の感情、「拳を振上げた」瞬間の衝動は真実のものであっても、次の瞬間、自意識が「片隅」の「怒らない心」を見出してしまい、急速に心が冷めていく、その「たよりなさ」を捉えている。

この際、自意識の目は、「おのれより富める友」あるいは「強い友」に、憐憫・嘲笑を受けるのは、ある意味当然であるといった方向にも動いているだろうが、決してそれだけではないことに、注意しておかなければならない。「おのれ」を愚弄した友を打ったからといって、自分の貧困や弱さが、解消されるわけではない、それならば「打つ」という行動は単に無意味である、という発見が、行為の実行を抑えていることが、むしろ重要なものではあるまいか。

肥大した自意識を抱えるとは、たえず自分を監視するレンズを、自己の内部にもつということである。こうした人間は、「今自分はこういうことをしているな。これにはこういう意味があるな。だからこうすべきだろう。」といったことを常に考えてしまつて、純粋な喜怒哀楽の感情に身を任せられない。

任せられないだけでなく、そういう思考をしていると、自分の内発的な感情や衝動が見つからなくなってしまう。根源的な意味での自分の意志が、どこにあるのかわからなくなる。「怒ることに意味がない」と思つた時に、はたして本当に自分は怒りを表現したいのか、あるいは本当に自分は怒っているのかどうかさえ、わからなくなるのである。

第三連において、「お前は／誰を打つか。」と、自分自身に対し、二人称で呼びかけていることは、示唆的である。こうした俯瞰的な位置から自己を眺める視線があるかぎり、「友」を打つことはできず、また「おのれ」をいくら打つてみても結局自分自身から逃れることはできない以上、振り上げられた「拳」は「やり場」のないままにおろされざるをえ

ないことが、「罪のない傍らの柱を」打つのか、という嘲笑的な結句に暗示されている。

こうした自己分裂、人間誰しもがもつ喜怒哀楽の起伏にあたつて、たえず「心の片隅に眼をパチ／＼して蹲つてゐる」喜ばず・怒らず・哀しまず・楽しまない心を意識する、自意識の「囚人」の姿は、直接には「我を愛する歌」に表出しているが、歌集『一握の砂』全体の根幹をなすものである。

さて、ふたたび歌集に目を転ずると、「怒らない（喜ばない・哀しまない・楽しまない）心」は、短歌においては「自意識の縛めを感じることなく、純粋な感情や衝動に身を委ねることの出来た、昔の自分を懐かしむ」あるいは「今現在、自意識に縛られることのない生を謳歌している、小児への共感」という形で、多く形象化されていることに気づく。

五三 ・ 知らぬ家たたき起して／遁げ来るがおもしろかりし／昔の恋しさ

六一 ・ 真剣になりて竹もて犬を撃つ／小児の顔を／よしと思へり
一三五 ・ 叱られて／わつと泣き出す子供心／その心にもなりてみた
きかな

一三八・庭石に／はたと時計をなげうてる／昔のわれの怒りいとしも
などの歌がそうであるが、最後の一首については、怒りの衝動からはたと「なげう」つた物が「時計」であることに、特に注意しておいていいだろう。先行研究では、『時計』は貴重なもので、（中略）即座に激しく怒りをぶつけたかつての自分をいうための設定^⑤と指摘されているが、さらにいえば「時計」は時間の暗喩でもある。

現在の「われ」が、もはや発作的な破壊衝動に従えないのは、「物を壊してみたところで意味がない」からというのが根源的な理由である。つまり、怒りを感じた瞬間（Ⅱ過去 から、破壊の実行（Ⅱ現在）を経て、行為のむなしさを思い返す（Ⅱ未来）までの、時間の展開に想いをはせるからであって、こうした人間には、もはや時間の比喩である「時計」をなげうつことができないのである。

そもそも「意味」の観点から見ると、怒りにわれを忘れるというのは、単に望ましくない過ちにすぎない。だが、自意識の縛めゆえに、一瞬の濃密な生を得ることも容易ではないこの男の目には、意味にとらわれずに激情すること自体が、たまらなく「いとし」いものと映るのである。

二・思郷歌の発生とその位置 煙

前章の最後で述べたような、自意識の袋小路が、少年の日への追憶という形をとって表出されるあり方は、『一握の砂』出版契約成立後に大量に詠出・採録された、いわゆる回想歌群の発生を考える上でも、きわめて重要である。

二〇〇・やまひある獣のごとき／わがこころ／ふるさとのこと聞けばおとなし

二二一・田も畑も売りて酒のみ／ほろびゆくふるさと人に／心寄する日

二四〇・わがために／なやめる魂をしづめよと／讚美歌うたふ人ありしかな

「やまひある獣のごと」く荒れ狂う心が、「ふるさとのこと聞けばおとなし」くなるのは、なぜであろうか。結論から先に言ってしまうと、「ふるさと」という装置を通した時には、「人に心寄」せることが可能になるからではあるまいか。

「我を愛する歌」の中には、次のような作品がみられる。

七二・けものめく顔あり口をあけたてす／とのみ見てるぬ／人の語るを

「あけたて」は「戸や障子をあけたりしめたりすること、その様子」を指し、生ある人間の一部分であるはずの「顔」・「口」を、即物的に眺めるさまが示されている。他人の「語る」言葉に意識を集中できずにいる時、「あけたて」する「口」は単なる物でしかなく、「人」の「顔」が「けもの毛・物」めいてみえたというのである。「けものめく」については、「相手に対する嫌悪感^⑥」という指摘があるが、嫌悪というより、好悪の感情をつきぬけた果ての、即物性、虚無のまなざしの表現であるう。

日々諸々の事象に対し、いちいち無感覚ではいられぬ心の内部で、疲労感が無限に増幅され臨界点を超えた時、裏返しの無感覚として現れることがある。この歌は、そうして立ち現れてきた虚無が、一種の幻覚状態にまで陥ったさまに表現を与えたものである。

言うまでもなく、他人への無感覚は、同時に自分自身をもてあます心でもある。作歌時には、この歌の前に「何よりもおのれを愛し生くというさびしきことにあきはてにけり」^⑦の一首が置かれており、自己も他者も一切が虚無に支配される閉塞した心のさまを示している。

こうして、肥大した自意識が袋小路にまで到り、反転するところに、

他者という装置によって、自己の屈折をほどこしてみたいという思いが現れる。

四八・ころよく／人を讀めてみたくなり／にけり／利己の心に倦めるさびしさ

一二三・誰が見ても／われをなつかしくするとき／長き手紙を書きたき夕

前出(五二、一〇七) 歌のような「へつらひ」「合榼」ではなく、心から他人を讀める心もちになつて誰かをほめてみたい。あるいは、自分を懐かしく思わしめるような手紙を書いて、誰かれとなく、他人の関心を自分に振り向けたい。こうした心境の背景には、「利己の心に倦めるさびしさ」が横たわっている。手紙は本来、特定の個人や団体にむけて書かれるものであるが、ここで企図される「長き手紙」は、いわばすべての他者に宛てた「手紙」であつて、自意識の回路の中で行き場を見失つて実存の危機に瀕した自分を、他人という回路に接続することで解放したいという願望の痛切さを示している。

だが、これは容易なことではない。こうした願いが所詮空望にすぎないと感じるほどに、自己と他者との間の越えがたい壁を思い知らされる時がある。

一七・わが泣くを少女等きかば／病犬の／月に吠ゆるに似たりといふらむ

前出(七二) 歌では、他人を意思の疎通をもたないけものとして眺めるさまが詠出されていたが、ここでは反対に、自分が他人から「病犬」

として眺められる。この「病犬」については、単に疾患を得て衰弱した犬ではなく狂犬とする解釈が、すでに提出されている^⑧。これに従えば、自分が泣く姿は、少女たちには、正気を失った猛獣が月に向かって狂い吠えているように映るであろう、という歌意になる。自分の性向を自分で熟知しながらどうすることもできない、そのもどかしさが時に涙となつて狂おしく奔流しても、そうした自意識の袋小路というものを理解できない他者の目には、異質な存在、理解不能な存在とししか映らないであろう、という絶望が表現されている。「少女等」とは、もつとも自分とかけはなれた存在であり、決して自分を理解することのできない他者を暗喩したものである。

以上をふまえて、ふたたび本章冒頭に引いた三首に戻りたい。

「やまひある獣」は、「病犬」に対応し、閉塞した回路の中で鬱屈し、ともすればコントロールを失つて暴れ出す自己の心を比喻している。そうした心が「ふるさと」にふれた時には、さながら巧みな猛獣使いに静められるかのように「おとなし」くなるといのである。この一首に、「ふるさと」という装置がもつ、現在の自分にとつての効用が、端的に現れている。

その「ふるさと」とは、どのような場所であろうか。「田も畑も売って酒のみほろびゆく」男、「わがためになやめる魂をしづめよと讚美歌うたふ」女の居る場所である。

酒は嗜好品であつて、生存に必要不可欠なものではない。酒代を得るために先祖代々につたわる田畑をも売り払うなどとは、本来狂気の沙汰であつて、そのことは本人として知っている。だが、「ほろび」への道であるとしつつそうしないではいけない、こうした「ふるさと人」の姿に「心寄する」のは、心を寄せる側にも、自分の性向やその結果を知

りつつそれをどうすることもできずに、悪循環に陥っているという、現状があるからである。

しかし、これを単に、不如意な現実をきっかけとして、かつて同じような境遇にあった故郷の男を回想し、感傷に浸ることではいささかの慰めを得る歌とすることはできない。

重要なのは、現在の場所と時間をいったん離れて、意識が「ふるさと」へ過去へと時空間をさかのぼり、「心寄する日」とふたたび現在にかえってくる過程で得られた、「ふるさと人」に対する深い共感の念、これが前出（七二）歌にみられるような、現在の他者への虚無感にも、変容をもたらすということである。^⑩

「わがためになやめる魂をしづめよと讃美歌うたふ」女についても、同様のことが言える。前出（一七）歌におけるような、自己と他者との乖離を嘆き、それを絶対的な乖離と見なそうとする意識は、かつて自分のために「なやめる魂をしづめよ」と祈り「讃美歌」を歌ってくれた人を想起することで変貌し、自意識の袋小路に迷いこんでいこうとする自己を、引き戻すのである。

一五二・病のごと／思郷のこころ湧く日なり／目にあをぞらの煙かなしも

思郷歌を集めた「煙」の章は、この一首をもつてはじまっている。都会の空にはきだされては消えていく「煙」を眺めて、心に湧いてくる「思郷」を、「病のごと」と喩えたのはなぜであろうか。思郷にともなう、しくしくとした痛みの表現であることは間違いないが、「病」は人をむしばむ元凶であるということを考え合わせると、「病のごと」という比喩には、「思郷」に対するある種の批評性が含まれている可能性

が考えられる。

啄木の随想「田園の思慕」^⑫は、この歌の初出^⑬とほぼ同時期に書かれている。この中では、「田園にゐて都会を思慕する人」の思慕が「より良き生活の存在を信じて、それに達せむとする思慕」であるのに比べ、「都会に於ける田園思慕者」のそれは、「より悪き生活に堕ちた者が以前の状態に立帰らむとする思慕」であり、「たとひその思慕が達せられたにしても、それが必ずしも真の幸福ではないことを知つての上の思慕」であるとして、「思郷」それじたいは、決して手放して肯定すべきものでないことが、語られている。

しかし、それでもなお思郷の念を「棄てたくはない、益々深くしたい。」と述べるのであるが、重要なのは、その理由について、「田園にゐる人の都会思慕の情が日一日深くなり、都会に住む者の田園思慕の情も日一日深くなる」ような現状の抱える矛盾が「遂には一切の人間をして思慕すべき何物をも有たぬ状態に歩み入らしむる」のではないかという危惧を述べ、さらにこの矛盾が「我々の手によって一切消滅する時代の来る」といふ信念を忘れたくない」としていることである。

「絶望的であり、消極的」な思慕である以上「思郷」は全面的に肯定されてはならぬ。だが、それが「思慕すべき何物をも有たぬ状態」に立ちいたることの拒絶表明として、現在の自分に「積極的」に機能する以上、「思郷」は肯定されなければならぬ。

この主張は、そのまま肥大化した自意識を抱えてもがく男が、「ふるさと」という、現実の共同体に代替される共同体を、みずからの必要において肯定する理由にもなっている。

人は人の中でしか生きていくことができない、他者という回路に接続しなければ自意識の袋小路で窒息するばかりだ、ということに気づいてはいても、まさにその肥大化した自意識ゆえに、現実の他者とうまく接

続できないでいた男は、「ふるさと」という装置を媒介とすることで、はじめて他者への共感を獲得することができた。はじめて本当の意味で「利己の心」(前出四八)を否定することができた。だが、「ふるさと」が、いわば代用品であり、自己を閉塞に追い込む現実の共同体は、厳然として存在する以上、全的にそれを肯定することはできない。しかしまた、「ふるさと」が、ともすれば袋小路に迷い込みがちな自意識に積極的に働きかけ、他者との接続を諦めそうになる現在の意識に変容をもたらす以上、それは肯定されなければならないのである。

三・都市生活における他者との共生 手套を脱ぐ時

前章でみたような経緯をたどって獲得された意識の変容は、都会生活をおくる他者すべてが、ある意味において自己と同じ宿命を分かちもつ存在である、という視点をもたらしている。

四七四・用もなき文など長く書きさして／ふと人こひし／街に出てゆく

長い手紙を書いている途中にふと人恋しくなつて書きさしのまま街に出ていく、というのが歌意であるが、そもそも「用もなき文」を書くというのが「人こひし」さゆえの行為であつて、長時間にわたる感情の連続を感じさせる。それでは、なぜ「文」の代わりに「街」が、選り直されたのであろうか。

四六六・空色の壇より／山羊の乳をつぐ／手のふるひなどいとしかりけり

四六九・ひややかに壇のならるる棚の前／歯せせる女を／かなしとも見き

「街に出」た男の目を引きつけるのは、都会に生きる女たちのたち働く姿、酒場のなにげない光景である。これは、「我を愛する歌」で興味深く眺められるのが、小児(前出六二)であり、ながながと寝そべって大きなあくびをする犬であるのと、対照をなしている。

山羊の乳を慎重にカップに注ぎ入れる時の「手のふるひ」は、壇の「空色」と相まって、初々しい女のしぐさを際立たせ、これを男は好感を抱いて眺める。もの慣れない女の様子に、まだ店に出て間がないのだらう、あるいは自分と同じように故郷を離れて都会に出てきた女なのかもしれない、といった身の上を想像してでもいただろうか。一方、壇の並んだ棚の前で人目をはばかりことなく楊枝をつかう女とは、いかにもすれた酒場の女という印象であるが、これを「かなしとも見」る心情は、決して嫌悪を示してはいない。かえって、女をそのようにいたらしめた気分や境遇を、興味をもって眺めるのである。いずれも、自分と同じく都会の日常を生きる人間への共感のまなざしが感じられる。¹⁵⁾

さて、以上をふまえて、ふたたび本章冒頭に引いた歌をみてみたい。「何がなしにさびしくなれば出てある」¹⁶⁾き、「にぎわひにまぎれ入」¹⁷⁾る「我を愛する歌」の自画像と比較すると、街に出る理由が「人こひし」さに特定され、群衆の中にまぎれるというよりは、人の温かみを求める気持ちの方に、重心がうつっているのがわかる。「人こひし」さが、「文」を書きやめて「街」の方に向けられたのは、そこが、同じ宿命を分かちもつ人々のうごめく場所だからではないか。

五三七・公園の隅のベンチに／二度ばかり見かけし男／このごろ見え
えず

もとより「街」で会おう人々は、行きずりの他人であり、多くの場合言葉を交わすこともなくすれ違ってしまふ。深い心の交流などは求めるべくもない。だが、彼らは皆自分と同じ都会の漂泊者である。その親愛が「公園の隅のベンチに二度ばかり見かけ」ただけの男をすら、気にかげさせるのである。「公園」は、都市の中に人工的に造られた憩いの場所であり、かつては「かの城址に寝に行」った自分も、今はそこでつかのまの解放感を味わうしかない。こうした感慨を抱いて眺める時、同じように公園を利用していたベンチの男は、もはやまったくの他人ではなかったのである。

おわりに

『一握の砂』出版より、およそ十ヶ月ほど前に書かれた啄木の随想に、「性急な思想^⑮」という作品がある。この中で、啄木は、近代人の神経の鋭敏ということに触れ、文学者が自分の神経の鋭敏を誇りとし、それを頼みにすることに、警鐘を鳴らしている。そして、「さうしなければ所謂『新しい詩』『新しい文学』は生まれぬものとすれば、さういふ詩、さういふ文学は、我々——少くとも私（中略）に取っては、（中略）全然不必要なものでなければならぬ。」と述べている。

それでは、新しい詩、新しい文学の展望は、どのようなところに拓かれなければならないか。

本稿でみてきたように、『一握の砂』という歌集は、人一倍鋭敏な神経をもつ「われ」が、「ふるさと」（過去）という装置を媒介として現在

を相対化し、それによって他者と接続する視点を手に入れて、自意識の袋小路を脱していく物語である。

啄木は、自分が「性急な思想」で発した問いに、文学的実践を通して、みずから答えようとしたのではなかったか。

注

- ① 上田博『石川啄木歌集全歌鑑賞』（出版元、発行年は参考文献欄に記載以下同）
- ② 歌集四〇・空家に入り／煙草のみたることありき／あはれただ一人居たきばかりに
- ③ 歌集五八・それもよしこれもよしとてある人の／その氣がるさを／欲しくなりたり
- ④ 初出「東京毎日新聞」明治四二・一二・二〇 「心の姿の研究 四」として「柳の葉」と同時掲載
- ⑤ 今井泰子『日本近代文学大系 石川啄木集』
- ⑥ 国際啄木学会『石川啄木事典』項目篇（イメージ 時計参照（執筆者・木股知史）
- ⑦ 新村出『広辞苑 第四版』
- ⑧ 岩城之徳「別冊國文學 石川啄木必携」、今井泰子『日本近代文学大系 石川啄木集』
- ⑨ 「明治四十三年歌稿ノート」一〇・二三夜
- ⑩ 近藤典彦『啄木短歌に時代を読む』
- ⑪ 上田博の先行研究に詳しい。「過去」を「現在」の経験として自覚的に経験する、そのことによってもたらされる結果は現在の意識の変貌である（『石川啄木 抒情と思想』）
- ⑫ 初出「田園」明治四三・一一
- ⑬ 初出「スバル」明治四三・一一
- ⑭ 歌集六〇・路傍に犬ながながと吠^{あくび}呻しぬ／われも真似しぬ／うらやましさに
- ⑮ 酒場の歌については、パンの会の詩人、特に北原白秋の影響が指摘さ

れているが、決してそれだけで生まれた歌ではない。木股知史は、「啄木の短歌の場合は、酒場の女の生活感に焦点がある。パンの会の詩人たち、たとえば、木下李太郎は、新旧の入り混じった東京の不思議な感触に引き寄せられたが、啄木は都市を漂泊せざるをえぬ人々の生活感に自己投影することをモチーフとしているのである。」『和歌文学大系 一握の砂・黄昏に・収獲』補注二二と述べている。

①⑥ 歌集四一・何がなしに／さびしくなれば出て歩く男となりて／三月にもなれり

①⑦ 歌集二二・浅草の夜のにぎわひに／まぎれ入り／まぎれ出で来しさびしき心

①⑧ 歌集一五八・教室の窓より通げて／ただ一人／かの城址に寝に行きしかな

①⑨ 初出「東京毎日新聞」明治四三・二・一三～一五

参考文献

上田博『石川啄木 抒情と思想』三一書房、一九九四

上田博『石川啄木 時代閉塞状況と人間』三一書房、二〇〇〇

上田博『石川啄木歌集全歌鑑賞』おうふう、二〇〇一

今井泰子『日本近代文学大系 石川啄木集』角川書店、一九六九

今井泰子『石川啄木論』塙書房、一九七四

平岡敏夫『石川啄木論』おうふう、一九九八

米田利昭『石川啄木』勁草書房、一九八一

橋本威『啄木「一握の砂」難解歌稿』和泉書院、一九九三

村上悦也・上田博・太田登『一握の砂 啄木短歌の世界』世界思想社、一九九四

木股知史『石川啄木・一九〇九年』富岡書房、一九八四

木股知史・藤澤全・山田吉郎『和歌文学大系77 一握の砂・黄昏に・収獲』

明治書院、二〇〇四

近藤典彦『啄木短歌に時代を読む』吉川弘文館、二〇〇〇

太田登『啄木短歌論考 抒情の奇跡』八木書店、一九九一

石川啄木学会『石川啄木事典』おうふう、二〇〇一
岩城之徳「別冊國文學 石川啄木必携」學燈社、一九八一

（本学大学院文学研究科研修生）